

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.56(2018年10月号)◆

早いもので2018年も残すところ二か月となりました、記録的な暑さや自然災害の続いた夏の疲れなどを感じておられる方も多いのではないのでしょうか。読書や芸術に親しむ秋を会員の皆さまが穏やかに過ごしに出来ますことを願っております。さて、いよいよ『Intelligence』19号の編集が始まりました。充実した号をお届けできるよう、編集委員一同、気を引き締めて参りますので、引き続き皆さまのご協力をお願い申し上げます。ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。ただいま、第26回の村山龍さんの「検閲官・佐伯郁郎旧蔵資料との邂逅」までネットでご覧頂けるようになっていきます。いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第121回研究会報告】(於早稲田大学:9月22日(土)午後2時30分～5時30分)

・仁井田千恵(早稲田大学非常勤講師・招聘研究員)

「メディアの音響空間をめぐるローカル/ナショナルの様相」

初期のラジオとトーキーが始まった映画との間のメディア・ミックスについて、弁士が語る未公開映画などの「映画物語」のラジオ放送、トーキー映画の音声をラジオで放送し、俳優の声流される「放送映画劇」など、興味深い事例を挙げて、その様々な様相について話して下さいました。

・賀茂道子(名城大学非常勤講師)

「資料紹介：占領期ラジオ番組「真相はこうだ」第1回、第2回」

戦後1945年12月から10回にわたり放送されたラジオ番組「真相はこうだ」における第一回放送「満洲事変」、第二回放送「日華事変(タイトル不詳)」の資料について、ご著書『ウォー・ギルド・プログラム—GHQ情報教育政策の実像』(法政大学出版局、2018)での考察を踏まえてご紹介下さいました。1945年10月から12月に放送されたこの番組は、CIEによる「ウォー・ギルド・プログラム」の実施時期とも重なり、同プログラムを分析する上でも重要と位置付け、現存する数少ないCIEが直接制作した占領初期のラジオ番組としての資料の重要性、そして国民感情に配慮し敬語を使用するなどマイルドな語りかけと転換したことを証明する資料の実証性から、研究知見をご報告いただきました。

・大原祐治(千葉大学文学部)

「占領期における地方雑誌と文学者—群馬県の事例を中心に—」

占領期ローカルメディアの諸相を伝える事例として群馬県で発行されていた雑誌『東国』をメインにご報告いただきました。『東国』は上毛新聞社を発行所とした雑誌で、群馬で活動した文学者が編集スタッフとして参加、終刊後は『月刊上毛』と改題し、より総合雑誌に近い編集を試みるなど、地方の出版文化が占領期に持った多彩さを豊富な資料を以てご報告いただきました。占領期の地方文化運動に関しては、CIEの関与や鉄道および印刷所といったインフラ整備の状況などを考慮に入れることの重要性が質問で指摘されました。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●第 123 回 20 世紀メディア研究会は 10 月 20 日(土) 午後 2 時半より、早稲田大学早稲田キャンパスにて開催されます。ご報告はフフバートル(昭和女子大)「満州で日本側が発行したモンゴル語雑誌」、太田奈々子(東大博士課程)「街頭録音について」、白山真理「同盟通信と写真協会」の予定です。皆さまのご来場をお待ちしております。研究会でのご報告御希望の方は、20 世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム：21 世紀に占領期の歴史を教えるということ】

後期開始が近づき、初回の講義準備に手をつけるこの時期になると思い出すエピソードがある。教養科目の「文学」を担当しており、後期は戦後文学を題材としている。受講生が確定する二回目あたりは占領期文化について話すことになるのだが、着任して最初の年のこと、講義後に回収するコメント欄に「マッカーサーという名前は聞いたことがありましたが、芸能人だと思っていました」とあったのだ。

一瞬、冗談かと思ったが、まじめでおとなしい学生気質を知っているので、ふざけて書いたわけではないらしい。日本の戦後がアメリカをはじめとする連合軍の占領によって始まったということも、「そういえば聞いたことはあります」程度の認識が主流だということを感じた。

よくある「学生と教員の世代感ギャップ」に回収される笑い話のようなエピソードだと思っていたが、事態はそう単純でもないらしいことを今春、アメリカに調査研究で赴いた際に知った。プランゲ文庫をかかえるメリーランド大学の卒業生でもある日系人の 20 代女性と話をすることがあった。彼女は学生時代にプランゲ文庫でバイトをした経験も持っている。その彼女によると、なんでも「メリーランド大学の学生の多くはプランゲ文庫の存在はおろか、アメリカの日本占領を知らないことも普通です」とのこと。聞くと 9・11 以降のアメリカでは、自国を強者とする歴史観に対して拒否感があるようだ。

さて、こうした事態を研究者はどう受け止めるべきなのか。「近頃の若者は」という常套句で悲観的に語ることは極力避けたい。いや、避けるべきだろう。他でもない自分の中にある「歴史」の自明性を疑うことに開かれているかどうか、研究者の姿勢が試されているのかもしれない。

このことは同時に、惜しまれながらも 2010 年に亡くなった歴史学者、トニー・ジャット (Tony Judt) の警句を想起せずにはいられない。ジャットは、ある歴史観が「型」のように繰り返されてしまうと、それは「凡庸化」に陥るため、何の感興も起こさないフラットなイメージになってしまうことを指摘した。「政治的な目的のために過去を引っ張り出して、役に立ちそうな断片を選り分けたり、都合の良い道徳的教訓を歴史に語らせたりしても、悪しき道徳と悪しき歴史しか得るものはない」(「戦後ヨーロッパにおける『悪の問題』」)。

おそらく、研究者が自分は「歴史」を知っていると過信したとき、「凡庸化」は始まっている。資料という、それ自体は何も話さないモノに対してただ向き合い、そこに残された「過去の声」を聞き取ること、そしてそれを伝え続けること、こうしたことを繰り返し、誰かにそれが届いているという「希望」を研究者が持てたとき、「歴史」は生彩を放って「現在」の中に息づくのだろう。「占領期のことなんて知りませんでした」と無邪気に言う学生たちは、その可能性への挑戦を研究者に教える存在なのかもしれない。

[9 月 27 日付 文責：鈴木貴宇]